

なった。アイデア発散ワーキングでなくさんのアイデアが出て、ヤマト運輸がSDGsに様々な方面から貢献できるポテンシャルを持っている「ことを実感した」と喜んだ。

ウルシステムズ(中央区)の漆原茂社長は、総評で「M

ONODAKEの発表はスタートアップ企業のピッチ(短めのプレゼンテーション)を聞いているようだが、梱包資材のリサイクルは面白い着眼点だと思っただ」と評価。

ヤマト運輸の秋山佳子・執行役員サステナビリティ推進部長は「少ない時間で幅広いアイデアが多く出たことに驚いた。デジタルとサステナビリティ(持続可能性)は非常に親和性がある。これからもデジタル技術やデータを活用して社会課題を解決することを期待している」と述べた。

学生向けハッカソンは8月に続いて2回目。インターシップの1環として開催されており、各チーム1人に贈られるメンター特別賞の受賞者には、ヤマト運輸の採用試験1次選考免除などの特典が与えられる。(高橋朋宏)

本社に公園オープン

ダイセーエブリー二十四

デスクワーク・休息活用

ダイセーエブリー二十四(田中孝昌社長、愛知県一宮市)は3日、本社の敷地内に開設した1千平方メートル「Bright Future Field」の初披露を行った。

「コミュニケーションが未来を拓く」をテーマに、田中社長の思いが詰まった公園の理想像を凝縮した。木々や植物は、遠方から輸送された樹木など30種類を

用意し、天然の芝生は定着する来年のゴールデンウィークまで養生の時間を取るなどのこだわりを見せる。公園には、デッキやワー

クススペース、トレイラハウス、たき火台を設置することで、リラクゼーション空間でのデスクワーク、休息時間の使用に加え、炊き出し、社内イベントでも活用できるよう整備。11月末には、自社の拠点長に向けたDX(デジタルトランスフォーメーション)説明会後に、近隣センターの従業員など200人が集まり、パトベキューで開園を祝った。田中氏は「オープンな自然の中でコミュニケーションを図ることによって新たな価値の創造につながる。自社にとって明るい未来の公園にしたかった。今後もSDGs(持続可能な開発目標)への取り組みの一環として、物流の新たな可能



木々や植物は、遠方から輸送された樹木など30種類を用意

性を切り拓く豊かな未来づくりを支えていきたい」と話している。(梅本誠治)